

最高の戦友愛

島根県 持田 武

五月部隊解散、復員。以上が私の戦歴である。

私は島根県出雲市で大正十（一九二一）年十月四日生まれ、昭和十六（一九四一）年度徴集の甲種合格。

昭和十七年一月四日、福岡県甘木の高射砲第四連隊へ集結、一期検閲修了、下関出港、大連上陸、鉄路で寧安着、野戦高射砲第五十五連隊（満州国牡丹江省寧安市満州第三六〇部隊）へ四月十六日入隊。

昭和十八年、部隊は戦車第一師団に寧安のレンガ造りの兵舎を明け渡し、蘭崗の木造兵舎に移駐した。

昭和十九年三月、大隊転用から関東軍より南支軍に編入、九龍上陸。第三十二軍直轄香港占領地総督部の指揮下に入り九龍港の防空に任じ、昭和十九年六月より第一期、第二期湘桂作戦に参加。

昭和二十年三月より広東省広東地区防空隊となる。

昭和二十一年四月、広東省黄埔出帆、浦賀港入港、

昭和十九年三月、満州から南支へ転用のため、その

出陣式は白雪に覆われた零下二〇数度の蘭崗の営庭において、山下奉文大将（関東軍司令官）の臨席を得て行われた。大将は太り過ぎて独りで歩行不能、両脇から二人の将校に抱きかかえられて「ヨイショ、ヨイショ」と大声で拍子を取りながら進退していたのを今もハッキリと思い起こす。

九龍に着くと香港を臨む丘の英軍兵舎跡へ入った。立派な建物でプールもついており私共は大喜びであった。某日夜間、コンソリデーテッドB 24単機が九龍上空に進入、出陣以来初めての実戦、夜間射撃をするが手応えなし。

昭和十九年七月、肇慶上空で夜間、B 24一機を撃墜、武勲をたてた。

第二次湘桂作戦に参加した我が部隊は、西方の貴州省へと進攻、奥地基地奪取、第二遣支艦隊（福島中将隷下の部隊）との協同作戦、西江を遡航、啓開作戦部

隊の対空掩護及び奪取飛行場の防空にあたった。

我が第三中隊は八月十一日清遠を發進。西南へ三水へ梧州を過ぎると、浅瀬に岩石が林立し、遡航は苦難を極めた。兵は冷たい水中に身を投じ岩石を取り除き、船体の持ち上げ等をして船の航行を計る。あの啓開遡航作業は今から考えても苦しかった。

十一月五日丹竹着。休む間もなく徹夜で陣地構築。二十三日、第一中隊はP51一機を撃墜する。直後にP51二機が偵察に飛来し、反撃に転じて第三中隊陣地に急降下、機関砲掃射。このため本間、私、当間の三人が負傷するが射撃を続けた。この奮闘に対して大隊長から褒賞を受けるが、当間は無念にも戦死。この時の事を振り返ってみる。

本間は北海道の人で一年先輩、胸部貫通。当間は広島の人で私と同年兵、腹部貫通。私は左大腿部擦過傷。

他の戦友が負傷した三人を担いで、雨の降る中を付近の民家の土間に草を敷いて、負傷者を収容し医務室

にしていた。三人は川の字になって寝ているが、私が一番軽傷なので看護兵のようであった。私が中央で二人が両脇にいる。衛生兵は私に「当間には水をやらん。飯盒や水筒を隠しておけ」と注意した。

夜中に私がふと目を覚ますと、当間が立ち上がって水を飲もうとしている。私は「コラ！ 当間！ 水を飲んだらいかん。分からんか！」と、恐らく鬼のような顔で叱った。当間は「申し訳ない、頼むから飲ませてくれ」と合掌して涙を流して哀願する。私はその必死に訴える当間の顔を見て、思わず首を縦に振った。当間は、今まで普段でも見せたことのない最上級の嬉しい顔をして私に感謝しつつ、うまそうな顔で水を飲み床の草の上へ伏した。

私は自分のとった処置が是か非か反省しているうちに眠りに入った。朝になって当間をみると、既に冷たくなって死んでいた。彼に水を飲ませた私の心は乱れて、現在に至るもふっきれない。

一方、本間の方は胸の貫通だから、大便を排出するのにいきむと胸が痛くて排便出来ない。便秘のように

苦しむ。初めは即製の木のスプーン様のものを作って肛門に入れて便をかき出そうとしたが、肛門の入り口あたりが赤く腫れて痛がり、そのうちに私は、自然と自分の手の指を口に入れて舐めた。ツバでヌルヌルする指を本間の尻に入れて溜った便をかき出すと、本間は気持ち良くなったと喜んで私に感謝した。この状態を何日間か繰り返して本間は快方に向かい、最後には胸の傷もよくなり無事退院、元気で原隊復帰出来た。

今でも戦友会の度に彼は奥さんと一緒に出席し「私が現在こんなに元気で生きているのは、持田さんの最高の戦友愛のおかげです」と、特に奥さんは私の手を取って涙を流して命の恩人と感謝してくれる。一度、北海道の札幌へ遊びに来てくれと懇請されるが、まだ行ったことはない。今考えても汚いとも思わず、ただ戦友の苦痛を除きたい一心で、親子、夫婦以上の処置が出来たのであろう。

戦争はいくら考えても無いのがよい。しかし、わずか三年ほどの戦友としての心のつながりこそ一生の誇りとしての。すべて懐かしい事ばかり。心の通い合え

ること、一つの事に皆が一生懸命にやったこと。皆の心のつながり、戦友愛の絆となって尊い。

昭和二十年一月、三南作戦参加。粵漢線に沿う基地群を奪取し、中南支の戦略兵站線の確保と兵力転用（二個師団を北上）、本土作戦に備える。第二十三軍（波集団・田中久一中将）は南支に集結、要域の確保、兵站線、補給路の維持に当たる。この頃、第五空軍は本上決戦のため台湾を去り、南支の制空は対空兵器に依存することになる。

大隊は広東に集結。第三中隊は三月十一日丹竹を出発、三月二十日白雲飛行場付近へ。八月終戦。中国軍の監視下に入る。帰国命令を待機。中国軍政部の命令で、平湖、広東で使役作業に従事。

昭和二十一年三月、帰国命令下る。二十九日、南石頭集中営を出発、三十日早朝、黄埔港へ到着。中国軍による最後の持ち物検査を受け乗船待機。四月一日、引揚船V 69号（リバッテリー型 六〇〇〇トン）に乗船。

四月二日午前八時出港。出港後間もなく船内にコレラ患者（他部隊）発生し死亡、汽笛吹鳴の水葬儀式によりその冥福を祈る。コレラ保菌者が船内に広がった。

四月九日午前九時、浦賀沖に停泊。国敗れて山河あり。帰心矢の如く、桜咲く祖国を目前にするも入国は許されず、二キロ沖合で船内隔離一カ月。第一中隊の佐藤伍長、吉田上等兵、祖国を目前にしての疫病死。まことに痛恨の極みであった。

五月九日、隔離解除。本土上陸後直ちに身体、衣類、所持品の消毒及びDDTによる虱駆除後復員宿舎へ。十一日復員式、十二日解散。浦賀から鹿児島へ復員列車は走る。それぞれ一路わが家へ。

ふりかえると、昭和十七年一月、福岡県甘木へ。四月寧安へ。昭和十八年早々から耐寒演習始まる。水上渡河、凍土の穴掘り、行軍などの寒中訓練では、防寒覆で包んだ水筒の水が凍り、防寒覆の飯盒の飯はカチカチとなる等の寒い思い出も尽きない。

復員後、昭和二十三年結婚。子供は女三人、孫三人、曾孫三人。家業の農業はもう卒業して、老人会長など務めている。妻も元氣、私も元氣で、今はもう言うこともなく平安に不足なく暮らしている。お互いに戦友の話もして交信すると健否も判明する。

永らく続いた戦友会も、平成八年、靖国神社で解散して淋しくなった。自分の体が動かないので、私は小さい戦友会をしている。戦死者、病死者、物故者の霊に手を合わせ御冥福を祈るばかりである。

「野戦高射砲五十五大隊隊歌」

一 風雲南に競い立ち

暗雲北に簞むれども

草むす屍 つわものは

今大陸に雄叫びて

将兵の意気 天をつく

二 醜鷲 天を掩えども

何ぞ恐れん我等今

一発必墜 撃滅の

地軸も揺らぐ砲声に

見よ 大空は晴れわたる

—後 略—

豊橋工兵第三連隊の想い出

愛知県 熊田 敏夫

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発。国内は戦時色が濃くなり、毎日のように応召の赤紙が来て、町のあちらこちらには、「祝入営」の幟が立ち、日の丸の小旗を手に手に「万歳、万歳」と出征兵士を見送る姿が多く見られた。

昭和十四年、桜も葉桜となった四月十五日の昼過ぎだった。役所の小使いさんが「熊田さん来たよ」と言つて召集令状を持って来た。来るとは覚悟はしていたが、いざ令状を手にした時は感無量の気持ちであった。当時、男として軍人として、出征兵士になったことは、この上もない名誉と思つてはいたが、心の引き

締まる思いでいっぱいだった。

それから五日後である。いろいろと身の回りの整理やら、親族への挨拶回り等をすませ、昭和十四年四月二十日、万歳の声に送られて豊橋工兵第三連隊第二中隊に入隊、第五班に編入となった。今までの一般社会とは、まるで別社会とも言うべき軍隊生活の始まりである。

厳しい内務班の教育、一般歩兵の訓練、演習等、三カ月の教育後、本職の工兵隊としての特技訓練である。破壊された道路の改修、あるいは渡河作戦の架橋作業等が我々の任務であった。このような実戦訓練は昼夜を問わずの猛訓練である。

河幅百メートルの場所への架橋工事の訓練の時だった。昼間は敵に見つかり攻撃されるので、真っ暗な夜のことだった。水泳の達人な者を選抜して、はじめに体に細いロープを巻き、流されながら向こう岸へ着く。太いロープをたぐり寄せながら向こう岸の立ち木を見つけてこれに縛り付け、こちら側も立ち木を見つけてこれに縛り、太いロープを皆でピンと引つ張